

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む  
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## リー・クアンユーとシンガポール、そしてマレーシア

黄蘊 (関西学院大学)

去る 2015 年 3 月 23 日にシンガポール建国の父といわれるリー・クアンユー (李光耀) が 91 歳の生涯を閉じ、一つの時代もとうとう終わりを告げようとしている。リー氏の死に伴い、連日リー・クアンユーの功績や、今後のシンガポールの行方を占う論評が相次ぎ出され紙面をにぎわしている。そのうち、シンガポールの新聞、テレビ各社は最も多くの報道、論評を発信しているが、その次が隣国のマレーシアで、さらに中国の紙面もリー・クアンユー関連の報道を多く掲載している。このような熱度からも、上記の国々とリー・クアンユー、シンガポールとの関係性の深さをうかがい知ることができる。

英領植民地からの自治領としての独立 (1959 年)、マレーシア連邦への加入 (63 年)、シンガポール独立 (65 年)、その後の諸立国政策制定の諸々はリー・クアンユーの人生物語そのものともいえ、氏の人生とシンガポールという国の誕生、成長とは切り離せないほど融合している。一方、リー・クアンユーは 90 年に首相を引退したものの、顧問相として政権内に居続けた。息子で現首相のリー・シェンロン氏は 2004 年より第 3 代首相を務めるなど、管理政治という政治文化を築いてきた「リー王朝」は批判にもさらされている。シンガポールは中国語では「新加坡」と漢字表記されるが、「李家坡」とも揶揄されているほどである。

しかし、いずれにせよ、マレーシア連邦より追い出されるかたちで余儀なく独立の道を歩み始めたシンガポールが、危機意識のなかで無資源の小国から先進国まで成長した軌跡に、リー・クアンユーの卓越した指導力、その政策的叡智の光がしっかりと刻まれており、功績は否定できないものといえよう。

リー・クアンユーの政策の中で最も重要なものの一つにバイリンガル、バイカルチャー政策がある。その根底には純粋な西洋的な価値観でもなく、また東洋的な世界観、言語のみに依拠するわけでもないという哲学がある。結果として今日のシンガポール人の多くは 2 つか 3 つの言語を同時に武器にし、世界に通用する人材がたくさん輩出されている一方、どちらもしっかりとできておらず地に足がついていない人が少なからずいるのも事実である。言語的多様性と同時に、シンガポールはマレーシアと同じく華人、マレー人、インド人という多民族性を有しており、それが媒介となって多様な人材が集められることで今日のシンガポールの栄光が築かれてきたと言っても過言ではない。

その中で、シンガポールの華人とマレーシア華人、また近隣諸国の華人との関係性は最も深く、シンガポールが東南アジアの華人の「首都」、ハブともなるような状況は見逃せないであろう。リー・クアンユー自身も父祖の世代からずっとシンガポールで生活しているわけではなく、父親は今日のマレーシアで生まれ、イポー、マラッカで生活したのち、リーの祖父とともにマラッカからシンガポールに渡ってきた。リー・クアンユーの夫人である故柯玉芝氏 (Kwa Geok Choo) は移民四代目のインドネシア華人で、小さい頃より教育を受けるため父親にインドネシアからシンガポールに送り込まれ、そこでリー・クアンユーと出会った。今日でも、東マレーシアのサバ、サラワク、マレー半島やインドネシアの華人住民たちは教育の機会、よりよい就職のチャンスを求めてシンガポールに渡る人が後を絶たない。医療などの関係で定期的にシンガポールを訪れる各国華人の姿もよくみる風景だ。

もっともマレーシアの政治家をはじめ国民は、かねてより隣国のシンガポールに対して複雑な感情を抱いている。エスニック政治に苦しむマレーシア華人はさらに幾重の感情を持つとみられる。その中で、羨望、妬みに近い感情が入り混じっているが、共通の植民地時代の歴史、近い社会状況に由来する心理的親近感が両国の華人にあることは否めない事実といえよう。リー・クアンユーの逝去をめぐるマレーシア華字紙の論調、読者のコメントからは、国内のエスニック政治に対する失望、シンガポールにその希望を託す心情がはっきりと読み取れるものである。

### < 筆者紹介 >

中国陝西省生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士 (人間科学)。専門は文化人類学。マレーシアとシンガポールの多元社会の問題、上座仏教、中国系の民間宗教について研究を行っている。上座仏教については、マレーシア、タイなどで調査を行っている。著書に、『東南アジアの華人教団と扶鸞信仰 徳教の展開とネットワーク化』(2011 年、風響社)、『往還する親密性と公共性 東南アジアの宗教・社会組織にみるアイデンティティと生存』(編著)(2014 年、京都大学学術出版社)。